
ひねりドアと嘘つき

cokoly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひねりドアと嘘つわ

【著者名】

N2315D

【作者名】

kokoy

【あらすじ】

ひねりドアが社会問題となる中、僕はドアの隙間から聞こえてくる嘘つきの言葉に耳をふさぎながら葛藤する。

ひねりドアの事は最近ささやかな社会的問題としてニュースでも扱われるようになつた。

建物の構造的な欠陥とか、ドアそのものの欠陥とか、いろいろ言われているが、ひねりドアはどこにでも現れる。様々な分野の専門家たちが日夜喧々諤々の議論を闘わせているが、今のところ決定的な解決策はまだ見出されていないようだ。人によつてはミステリーサークルにも匹敵する怪奇現象だなどと主張したりもしている。事実はどうであれ、僕ら庶民の生活レベルからすればただただ迷惑なだけである。

そんな折、ある夜僕が仕事から帰つてくると、わが家の玄関はかなりひねくれたひねりドアに変わつていた。

ひねりドアをしっかりと閉めるのは難しい。

ドアそのものもひねつているが、その周りの枠も同じようにひねつてるので形を合わせる事は可能なはずだが、ちょっと上にずらしてから押す、とか、軽く外に引っ張つてからノブを回す、など、ドアを閉める作業に頭を使う事になる。全身で解き明かす為に作られた知恵の輪みたいなものだ。

ひねりドアを閉めるのは案外結構な体力を使う事になるので、めんどくさくなつて隙間の開いたまま強引にドアチエーンをひつかけ、放つてしまつなくなる。

でもちゃんと閉めないと、夜には嘘つきがやつて来て隙間から顔を出し、僕に悪い誘いをかけてくるのだ。今朝のニュースでも「ひねりドアと嘘つきはセットです」みたいな事を言つていた。

ここしばらくは残業続きで疲れていて、僕はどうしてもひねりドアにきつちりと対処する事が出来ないでいた。そして僕が風呂から上がつてベッドの中に潜り込む頃になると、玄関の辺りからぼそぼそと声が聞こえてくるようになる。

確かに嘘つきがやって来たのだ。

「ねえねえ小堀さん、あなたの彼女の梨花さんはは今あなたの上司の鎌倉さんと寝ているよ。いいのかい？」

「それに鎌倉さんは君の事が邪魔だから、地方に左遷しようとしているんだよ。そんなヤツはすぐに懲らしめた方が良い。やつちやい

る事は嘘なのだ。まともに聞いてはいけない。

「僕は蒲団を頭からかぶつて聞こえないようにする。彼の言つている事は嘘なのだ。まともに聞いてはいけない。

「やつちやいなよ」

嘘つきはさうして僕のプライベートを調べたのだろう。しかし嘘つきは二つの時代もどの国でも意図的に他人を貶めようとする悪人でもある。そんなヤツの言つ事を信じるわけにはいかないのだ。嘘つきへの対応法としては、ただ一つ「耳を貸さない事」だと言われている。しかし彼らともしぶとく、粘り強い。生半可な意志では耐える事が出来ないのだと呟つ。

「君の彼女は君が思つていいよりとてもイヤラシい事が好きなんだ。浮気の相手は鎌倉さんだけじゃないよ。他にもいっぽい居るんだよ」

僕はなんとかしてくたびれた頭を振り絞つて毎日ドアをしつかり閉めようとしているのだけれど、僕は昔から知恵の輪を解くのが苦手だったし、残業続きで終電帰りが続いているから体力も限界に近い。どうしてもドアを閉め切れない日が出てきてしまう。そして嘘つきはそんな隙を見逃さない。確かに専門家の言つ通り、彼らは驚く程ままで粘り強い。

「それで困つてるんだ」

僕は女友達のマコミに相談した。マコミは会社の同僚でもあり、学生時代からの友達付き合いだ。なんと言つても信用できるし、彼女が昔ひょいひょいと知恵の輪を解いていた姿を思い出して、何か知恵が借りられないかと思つたのだ。

「彼女には相談してみたの？」

「いや、忙しくて最近会つてないんだ。電話では話すけど

「まさか、嘘つきの言葉に惑わされているんじゃないよね？」
「冗談じゃないよ。だいたい、梨花と鎌倉さんに接点なんかないもの

の

「さう？ それならいいけど」

マコミはそう言ってワインの入ったグラスを傾けた。

「ひねりドアはどうやって開きちゃんと閉められるのかな？」と僕は聞いた。

「一度解こっちゃえばあとは同じよ。最初にこうして、次にこうして、つて覚えちゃえば良いのよ

「でも僕はあれが苦手なんだ。たまにきちんと閉められる時があるけど、どうやってそうなったのか全然分からんのだよ」

「小堀君は昔からそういう所があるからなあ。頭悪い訳じゃないのに、なんでだろ？」

「それが分かれば苦労しないよ

僕はそう言って自分のビールを一気に飲み干した。

「うちにも一度嘘つきがきたよ

とマコミが言った。

「へえ、マコミがドアを閉められなかつたの？」

「わざとよ。嘘つきがどんな嘘をつくのか聞いてみたくて

「何を言われた？」

僕が聞くとマコミはその時の事を思い出すような顔をしてふふふとひとりで笑つた。

「ないしょ

「なんだそれ、言えよ

「ねえ、ドアの閉め方教えてあげようか

マコミは僕の言葉を無視して言つた。それは願つてもない提案だったんで、僕らはそこで店を切り上げて、僕の家に行く事にした。

僕がどうやってもうまく閉められないひねりドアを、マコミはまるで扱いに慣れた自分のもののように簡単に閉める事が出来た。

「さすがだね」

「ほんなの、なんでもないわよ」

マコミはまんまと手を打つて「お茶煎れてほしけなあ」と僕に

言った。

マコミは僕の入れたお茶を飲みながら、

「ほんとうに嘘つきの言つてる事が気になつてるんじやないの」と

言った。

「そんな事なによ」

「そりかな? ドア閉めるへりこなら梨花さんにも出来るんじやない? どうして私なの」

「マコミは信頼できるかられ」

「それだけ? だったら他の男友達でも良いじやない」

「迷惑だつたら謝るよ。でも、君が自分で言つ出したんじやないか」

「そりだつけ? ゼンゼン覚えてない」

マコミは何だかいつもと雰囲気が違つて見えた。アルコールはもう十分に抜けているはずなのに、酔つぱらつて絡んできているみたいだった。テーブルに両肘をついて手にあごを乗せ、どこかとろんとした目で僕の方を見ている。現実的な感覚から少し離れてしまつたようなフワフワとした目つきだ。僕は何だか落ち着かなかつた。

「マコミ、今田はなんかおかしいよ」

「やつら?」

どう見ても変だ。僕は何となく、気にかかつっていた事をマコミに聞いてみた。

「君んところに来た嘘つきは、なんて言つてたんだ?」

「ないしょつて言つたでしょ。それよりいい事教えてあげる。梨花

さん、本当に浮氣してるわよ」

僕はすぐにはマコミの発言に反応する事が出来ず、お茶を飲もうとした手は空中で止まってしまった。

「本当よ。私見たんだもん」

「あひめ」

僕がそりひつて、マコモは椅子から立ち上がり、じりじりと僕の方に近づいてきた。

僕が何か言おうとした時、僕の口がマコモの口によつてふさぎれてしまった。

僕は混乱した頭の中で、マコモが嘘つきの顔でたぶらかされてしまったか、そりでなけれどもマコモなのだと悟った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2315d/>

ひねりドアと嘘つき

2010年10月8日15時08分発行